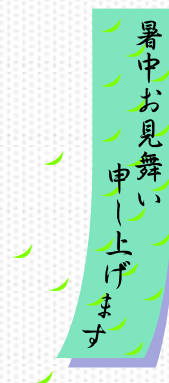


# 日本国際情報学会通心

発行日 2009.8.9 日本国際情報学会

## 目次

- |                                |           |
|--------------------------------|-----------|
| 【1】ごあいさつ                       | 会長 近藤 大博  |
| 【2】「地方分権と政治の話」                 | 理事 安田 守   |
| 【3】ナイティンゲールの「variety」から学ぶ      | 会員 児玉 善子  |
| 【4】死への受容<br>エリザベス・キューブラー・ロスの生涯 | 会員 柏田 三千代 |
| 【5】「杜甫と芭蕉の猿」                   | 会員 山本 勝久  |
| 【6】大阪地方研究発表会の報告                | 理事 坊農 豊彦  |
| 【7】日常性から日常性へのワープ               | 会員 長井 壽満  |
| 【8】事務局からのお知らせ                  |           |
| 【9】特別報告                        |           |
| 【10】編集委員からのお知らせ                |           |
| 【11】編集後記                       |           |



## ごあいさつ

本年7月11日、大阪にて、研究発表会を持ちました。各位の尽力により、大成功でした。IT機器の発達により、国境を越えての意見交換も簡単になりました。しかし、集合して直接交流する意義・効用には想像以上のものがありました。今後も、各地での研究会を重ねたいと念じています。会員各位の発議を待望します。

現在、『日本国際情報学会誌』第6号の論文を募集しています。電子紀要として発行しますので、全世界の方々に読みいただける学会誌です。全世界の方々に査読していただく学会誌と称してもよろしいでしょう。全世界の研究仲間に資する論文が数多く投稿されることを期待しています。

会長 近藤 大博

## 日本国際情報学会通心

## 「地方分権と政治の話」

理事 安田 守

先日開催されました「大阪地方研究会」で『地方分権の方向性』という題目で発表をさせていただきました。地方分権の話はマスコミでも大きく取り上げられていますし、地方の首長選挙だけではなく国会議員の選挙でも大きな争点であります。発表の中では、中央集権よりも地方分権を進めるべき理由やその方法、更には予算等の削減における国と地方のダブルスタンダードに対する指摘や、国の直轄事業制度の見直しについてなどをかいつまんで話をさせていただきました。

振り返りますと、戦後の日本では生活に必要なインフラ（水道・電気・ガス等）や経済活性化に必要なインフラ（道路・空港等）が全国的に不足しており、その整備を全国一律に進める上では、中央集権体制が効率良く都合が良かったと言えます。

経済の急成長と人口増加は、中央集権体制による管理や財政出動のプラス面がマイナス面を補って余りあったのですが、バブルの崩壊と時を同じくして、全国的にほぼ整備されたインフラの維持費負担が大きくなったばかりか、少子高齢化により、人口増加が前提であった経済成長も止まってしまいました。加えて中央集権により許認可権限が東京（霞ヶ関）に集まっていることから、企業が東京に集中し、東京一極集中と地方の疲弊が顕著になってきました。

このようなことがきっかけになり「地方分権」が大きく取り沙汰されるようになってきましたが、地方分権の本質的なメリットは、その地方の住民のニーズ（実情）にあった対応や施策を速やかに実行に移せることです。ところが現実には、国からの多くの制約があり、簡単に施策を実行できない、つまり、市町村 都道府県 国（要望事項） 国 都道府県 市町村（決定事項）といった一連の流れがあるために、速やかに実行できないばかりか、国が行う施策はどうしても平均的な施策になり、都市部と過疎地域の両方の要望を満たすことは難しいのが現実です。

地方分権を進めるにあたって、いわゆる「三位一体の改革」が実施されてきましたが、現状では権限と財源が十分に移譲されていません。北海道夕張市が財政再生団体に転落したことは記憶に新しいですが、このままでは都道府県という行政単位が財政再生団体に転落するかもしれません。地方自治体が破綻すれば、行政サービスの大幅な低下は避けられず、住民にとっては大きな不利益となってしまいます。

地方分権が進まない要因は、利権や既得権益など、住民サービスとは大きく離れたところにある事は否めませんが、地方が破綻したときには即住民に影響を与えることは忘れてはなりません。私は住民と直に接する地方議員という立場で、今後も住民のニーズに即した行政サービスを行うために「地方分権の方向性」をしっかりと見極めていきたいと思っています。

ところで、国際情報学会やニュースレター、更には政治や行政に興味がある人にはこのような話で盛り上がる事もできますが、先日初めて会ったとある人（選挙区外で30代の女性）が「自民党と民主党ってどれくらいの割合なのですか」と聞かれ、私は「・・・・？」。よくよく聞いてみると衆議院議員には自民党や民主党に割り当てられた議席数があると思っておられました。また数日後に近所の喫茶店で会った知り合いの人（選挙区内30代の女性）に「先生の選挙はいつですか？」と聞かれ「私の選挙は1年と8ヶ月後ですけど、それよりもうすぐ衆議院議員の選挙ですから大変です」と答えますと、「あっそうなんですか、もうすぐ選挙なんて知りませんでした。全然興味が無いもので・・・」と話されていました。

ある意味大きな衝撃を受けたのですが、地方分権を語る前にすべきことがあるのではないかとそれ以来考えさせられています。

## 日本国際情報学会通心

## ナイティンゲールの「variety」から学ぶ

児玉 善子

2009年7月11日に開催された日本国際情報学会「地方研究発表会」で、私は、「スピリチュアルケアの探求」というテーマで発表させていただいた。私が、精神科・児童精神科外来に勤務している看護師であるということから、会場の皆様から「うつ病」に関するご意見やご質問をたくさん頂いた。確かに、うつ病を理由とした労災認定数が昨年は過去最高となり、「社内の心の病は増加傾向」と回答した企業が六割に上るとい調査もある。うつ病に対する関心の高さはもちろんのこと、同僚や部下がうつ病になったとき、どのように回復を支援していけばよいのかという具体的な悩みを抱えていることがわかった。そこで、今回「うつ病」からの回復について、近代看護教育の生みの親であるナイティンゲールの『看護覚え書』を用いて、私の考えをまとめてみようと思う。

まず、ナイティンゲールは「病氣」について、すべての病氣は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程であり、外因によって侵されたり内因によって衰えたりする過程を癒そうとする自然のはたらきであると述べている。つまり、われわれが病氣とよんでいるものは、自然が作り出した回復過程であるというのだ。それに関連して、ナイティンゲールは、「看護」について「新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするよう整えること」と定義しており、患者の病氣による症状を取り除くのではなく、自然の回復過程をうまくすすめていけるように環境を整えることが「看護」であるといっている。

興味深いことにナイティンゲールは、患者の回復期にとって大切なものの一つに「変化」をあげている。ナイティンゲールのいう「変化」とは、「change」「shift」「turn」ではない。「variety」である。回復期の患者が、これといって問題がないのに何ら進歩を示さずに何週間かを過ごすことがある。そのようなとき、窓の外、壁の絵や花を見ること、お腹の底から笑うこと、あるいは、簡単な手仕事などをするることによって、患者自身が自分の気持ちを変えられることができるという。つまり「variety」は、「飢えた眼が変化を渴望するのは、まさに飢えた胃袋が食物を求めると同様」であり、その人の自然が作り出した回復過程を促進させるために必要な栄養素となるのである。

ところでうつ病の病相期は、「不安・いらいら」「憂鬱」が主な症状である。自責感、自己否定感、絶望感、不安感、焦燥感などの感情に振り回されている時期でもある。また、うつ病は、脳内の神経伝達物質であるノルアドレナリン、セロトニンの機能的欠乏が有力視されているように、脳の自己調整機能が疲弊している状態である。この時期は、心身ともに十分に休養し、本来の機能を取り戻すことが大切である。そして、回復期に入ると少しずつ「休養」から「社会復帰」へと移行させていく。この時期、散歩や外出、興味のあることを試しに始めてみる。ただ、うつ病の回復期は、良くなったり少し悪くなったりを繰り返すので、あくまでも「ゆっくり」が必要である。簡単にうつ病患者の回復期の支援についてまとめてみると以下のようなになる。

- ・患者のペースで、「休養」から「社会復帰」を見守る。
- ・職場復帰はまず「ならし運転」から始める。
- ・内服薬の継続を応援する。
- ・回復期だからこそ見えてくる現実、回復期だからこそできる行動力があるため、自殺の衝動に注意する。
- ・気分の波を知っておく。元気なときに標準を合わせると落ち込んだときに、ついつい励ましがちになるので気をつける。

うつ病から回復した人は、当時を「あの休息があったから、本当に大切なものがわかった」「立ち止まらなかつたら死んでいたかもしれない」「降り続ける雨はないとわかった」などと振り返ったりする。回復期は、自分や周囲の者を責めるのではなく、少し立ち止まり自分のこと、病氣に至った生活のこと、これまでの生き方や価値観などを見直してみる時期かもしれない。ただ、ひたすら考えてもどうしようなく出口が見えず、不安や焦燥感で一歩たりとも前に進めないときは、周囲にいる者がそれに気づき、「variety」を与えてみてはどうだろうか。「variety」を患者自身が受け入れ、自分なりに消化できたときは、自分を成長させてくれる栄養素を取り込んだことになる。その栄養素は、既存の概念を壊してくれる力や自分の潜在的な能力を引き出す力になる。その力はやがて、新しいものの見方、考え方、価値観、そして自分の生き方に繋がりが、うつ病からの回復を助けることになると考える。

## 日本国際情報学会通心

## 死への受容 エリザベス・キューブラー・ロスの生涯

柏田 三千代

精神科医であったエリザベス・キューブラー・ロスは、終末期患者を講師として招き、セミナーを行った。そして、「死とその過程」において、死を直視しながらも、まだ生への望みを持ち続けている「否認と孤独」、「どうして私なのか」という怒り・激情・妬み・憤慨といった感情が周囲へ向けられる「怒り」、「避けられない結果」を先に延ばすべくなんとか神と交渉しようとする「取り引き」、この世との永遠の別れのために心の準備をしなくてはならないという深い苦悩・喪失感がある「抑うつ」、感情が殆ど欠落し、死を受け入れる「受容」という過程を経ること、すなわち「死の五段階」説を提言した。キューブラー・ロスの働きは、死を学問として確立し、今日のホスピスの道を切り開いていったが、しかし、死の専門家としてのキューブラー・ロス自身は、果たしてこのような「死とその過程」を経たのだろうか。そして、死を受容出来たのだろうか。そこで、エリザベス・キューブラー・ロスの生涯を振り返り、キューブラー・ロス自身の死への受容について考えてみたいと思う。

エリザベス・キューブラー・ロスは、1926年スイスのチューリッヒで三つ子の長女として生まれた。幼い頃より親からの愛情を余り受けていないと感じていたキューブラー・ロスは、高校卒業と同時に父親の薦める職に就かず反発し、家を出る。そして第二次世界大戦後、人の役に立ちたいという思いから「平和を守る国際ボランティア奉仕団」の一員としてポーランドへ赴き、マイダネク強制収容所跡で収容所の生存者だった一人のユダヤ人少女と出会い、人間の残虐性と神聖さを胸に刻む。

スイスへ戻ったキューブラー・ロスは、チューリッヒ大学医学部へ進学する。この在学中にユダヤ系アメリカ人イマヌエル・ロスと結婚し、一男一女を儲ける。そして、精神科の医師となったキューブラー・ロスは、マンハッタン州立病院で、精神病患者たちへの体罰を廃止し、分裂病患者の95%を退院させて、社会復帰を果たした。

1965年シカゴ大学ピリングズ病院精神科に勤務し、「死を研究したい」という学生らと共に「死とその過程」に関するセミナーを始めた。1969年、キューブラー・ロスのセミナーが『ライフ』11月号の特集記事として発表され、同年『死ぬ瞬間』が出版すると、またたく間にベストセラーになった。この時、死の専門家エリザベス・キューブラー・ロス、「死の五段階」説が世界中に広まったのである。それからのキューブラー・ロスは、世界中を駆け巡り、講演をこなし、セミナーやワークショップを指導した。

しかし、それまで「死とその過程」を論述していたキューブラー・ロスだったが、彼女自身が臨死体験したことで「死後の生」や「輪廻転生」を信じるようになり、論点が変化していった。そのことが原因で、彼女の周りから多くの人々が去っていった。また、最愛の夫とも離婚することになる。

晩年のキューブラー・ロスは、一人アリゾナに移り住むが、何度も脳卒中を起こし半身麻痺となり、長い闘病生活を送る。そして、2004年にキューブラー・ロスは家族に見守られながら、グループホームで永遠の眠りについた。

キューブラー・ロスの死後、彼女の生涯をBSドキュメンタリー「最後のレッスン」と題して放映された。それはキューブラー・ロスが死の専門家として活躍していた頃は勿論のこと、グループホームで死を迎える直前までの様子がかがえた。私が一番驚き、注目したのは晩年のキューブラー・ロスである。脳卒中の後遺症で半身麻痺となり、1日の大半を椅子に座って過ごしているキューブラー・ロスは、神について「あなたはヒトラーだ。」と神を罵るのだ。「何故、私がこんな目に合わなければならないのか。」早く死にたいと思いつつも、死ぬことが出来ない辛さや怒りを訴えているのだ。死の専門家として死を迎える人々に優しく語りかけてきたキューブラー・ロスとは思えない、もう一人のキューブラー・ロスがそこにはいた。

死後についてキューブラー・ロスは「銀河でダンスをするの。」と話していたそうである。銀河でダンスというのは、死後の生を信じたキューブラー・ロスが身体からの束縛や苦しみから解放され、愛しい人達との再会を果たし、精神の自由が得られる素晴らしい世界を想像していたのではないだろうか。それは、キューブラー・ロスが死を受容しつつあった瞬間かもしれない。しかし、昏睡に入る前のキューブラー・ロスにホスピスケア専門家が「旅立ちの準備は出来た。」と問いかけると、彼女は「まだよ。」と答える。そして、キューブラー・ロスはそのまま昏睡状態に入っていった。昏睡状態のキューブラー・ロスは、最後に家族の声に反応し、睫毛を少し動かし息を引き取った。この睫毛の動きこそが死への受容だったのだろうか。

キューブラー・ロスは死の専門家である。誰よりも死について勉強し、理解していた人である。そのキューブラー・ロスさえ死を受容することの難しさを自分の身をもって、私たちに教えたのだろう。

## 参考資料

エリザベス・キューブラー・ロス：『死ぬ瞬間』、中央公論新社、2001年

BSドキュメンタリー「最後のレッスン」：<http://video.google.com/videoplay?docid=-8927674700503999889>、2009年8月1日

## 日本国際情報学会通心

## 「杜甫と芭蕉の猿」

山本 勝久

杜甫晩年の詩に「秋興八首」と名づけられる作がある。その第二首を以下にあげる。

暖府孤城落日斜	暖府の孤城に落日斜めなり
每依北斗望京華	毎（つね）に北斗に依りて京華を望む
聴猿実下三声淚	猿を聴きて実（げ）にも下す三声の淚
奉使虚随八月查	使いを奉じて虚しく随う八月の查（いかだ）
画省香炉違伏枕	画省の香炉 伏枕に違い
山樓粉皎隱悲筳	山樓の粉皎 非筳隱たり
請看石上藤蘿月	請う看よ石上藤蘿の月
已映洲前蘆荻花	已に映ず洲前蘆荻の花

唐詩では猿の鳴き声は独特の哀調をもつものにとらえられている。もっとも、こういった猿は長江中上流の三峡の断崖絶壁の上の山中に生息するそれに限定される。『水経注』（卷三十四）に「常に高猿（高所の猿）長く嘯き、厲引凄異なる有り。空谷に響きを伝へ、哀転して久しくして絶ゆ。故に漁者歌ひて曰く、「巴東の三峡 巫峡長し。猿鳴くこと三声淚 裳を霑す」とあるのがそれである。上掲の杜詩もこの文をふまえたものであることはいままでもない。強い風にひきちぎられてとぎれとぎれになった猿の鳴き声は、長安から遠く離れて漂泊の生活を余儀なくされた杜甫の心中と響きあうところがあったのであろう。

猿の鳴き声について、『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に「其の鳴くや癡癡として悲し」とある。この「癡」は現代語（中国語）では「叫」とおなじで、大声を出すことであるが、六朝以来の詩語では哀しい気分をさそう鳴き声をさす。わが国の南方熊楠は『十二支考』において、その声を「キャッキャッ」と表している。こういった鳴き声にどの程度哀しさを感じるものか知らん、古来日本の歌人は猿声をあまりあつかわない。『古今和歌集』には「わびしらにましら（猿）ななきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ」（凡河内躬恒）の一首がみられるのみである。鳴き声で多いのは猿声でなく鹿鳴の方である。ところで、この猿声を堂々とあげたのは芭蕉である。『野ざらし紀行』につぎのような俳文がある。

富士川のほとりを行くに、三つばかりなる捨て子のあはれげに泣くあり。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命待つ間と捨て置きけむ。小萩がもとの秋の風、こよひ散らん、あすや萎れんと、袂より喰物投げて通るに、猿を聞く人捨て子に秋の風いかにいかにぞや、汝、父に悪まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝が性のつたなきを泣け。

ここにおさめられた発句は「七・七・五」の破調の句であるが、字余りの上五で「猿を聞く人」と強く呼びかけている。猿の鳴き声がよまれるのは漢詩であるから、芭蕉が呼びかけている相手は、杜甫をはじめとする中国の詩人である。尾形侑はこの句に次のような口語訳をあたえている。

巴峡の猿声に耳を傾けて客涙を催し腸を断った詩人たちよ、この富士川のほとりに捨てられた捨て子の上を吹く秋風の悲痛さを何と聞くや。（『野ざらし紀行評釈』p39）

芭蕉は社会的無力者との自覚があったが、その一方で、無力な捨て子に深いあわれみを感じることできる人でもあった。ただ、この俳文を一読してわかるように、芭蕉の力点はあくまでも捨て子におかれており、猿声は脇役である。あるいは捨て子の声に触発されて中国古典にみられる猿のすがたを幻視したというべきか。いずれにせよ、芭蕉において詩語としての猿声は実感をともなっていなかったようである。この点、「猿を聴きて実にも下す三声の淚」とよんだ杜甫と大きく異なっている。熊楠は「キャッキャッ」と表現したが、甲高く金属的ともいえる猿の鳴き声に哀調を感じることに、芭蕉はどこか違和感をおぼえたのではないか。ちなみに、芭蕉が発句において猿声をよんだのはこの一句のみである。

御利用のPCによっては、文字が正しく表示されない場合がございます。

## 日本国際情報学会通心

## 大阪地方研究発表会の報告

坊農 豊彦

平成21年7月11日(土) 10:00~17:15、大阪市北区、常翔学園大阪センター304会議室にて日本国際情報学会の大阪地方研究会を開催いたしました。当初、5月23日に予定していましたが、新型インフルエンザの影響で2カ月延長をしておいた発表会でした。

今回の発表会の大テーマは「現代を生きる、国際社会の中の関西」と題して12名の本学会員の研究者に、各位の研究テーマにて発表していただきました。参加者は合計31名で学会メンバー以外にゲスト参加もあり大盛況の中、無事に終了いたしました。

今回の大会では、新たな試みとして、発表者のテーマに対して、参加者全員でのディスカッションを活発に行おうと、発表者の皆さんには質疑応答の時間を多く取っていただきました。その結果、思った以上の活発なディスカッションが行われ、ひとりの発表は30分枠で行いましたが、ほとんどの発表者の時間枠が足りなくなるほどでした。

大会終了後、参加者にアンケートを取った結果、ほとんどの皆さんが満足された様子ですが、やはり発表者の時間をもう少し長くしてほしいという要望がたくさんありました。次回は、もう少しテーマを絞り、更に内容の濃いディスカッションになるような発表会を企画したいと考えております。

最後に発表いただきました学会員の皆様、お忙しい中、ご参加いただきました皆様に、改めてお礼申し上げます。また今回、参加できなかった学会員の皆様、次回は関西旅行を兼ねて是非ご参加ください。お待ちしております。

平成21年7月11日 大阪地方研究会当日の発表風景



## 日本国際情報学会通心

## 日常性から日常性へのワープ

長井 壽満

仕事から、頻繁に中国へ行く。西南地域中心である。中国は広い。西・東ヨーロッパ（ポーランドあたり迄）の総面積より広い。広いということは、多様でもあるということである。多くのメディアは中国という言葉で現象を説明しようとする。しかし、中国語を話せるスタッフをほとんど抱えていない日本のメディアが中国の論評するなんて、ちゃんちゃら可笑しい。

西南地区とは四川省、重慶、貴州、雲南の四省、総人口2億人を指している。読者はまだ西南地区のイメージが湧かないであろう。三国志の蜀（劉備）の国のあたりと書くとイメージが湧く人も居るはずである。パンダの生息地でも良い。同時に多くの少数民族の居住地でもある。四川省にはチベット自治区もある。多くのチベット人が住んでいる。そのチベット人も多様である。チベット族には四つの言葉がある。漢族に普通語、上海語、広東語、福建語、等等……。中国で使用されている言語は100以上あるだろう。四川省の西部、貴州、昆明省は山岳地帯であり、交通の便が悪かった。それゆえ、地域的に人々の移動・交わりが少なく少数民族が多くなったのだろう。

貴州・雲南は東アジアの入り口でもある。ベトナム、カンボジア、ミャンマーへ行く通過地である。国境なんてヨーロッパが押しつけた制度である。国境を跨いでいる家もある。雲南は東南アジア・中国間貿易の要衝である。重慶で生産したオートバイ（ホンダ・スズキ、中国製）はベトナム経由タイに輸出される。国境貿易の量が大きくなっている。そして使われる通貨は人民元である。ベトナムの銀行には人民元為替表示ボードが既に設置されている。あとは電源を入れるだけである。雲南省は麻薬のルートでもある。さらに一つ重要なのは、中国の過去の戦乱から比較的離れた地域であった。中国の戦争は東北（満州）・中原（黄河・揚子江沿岸地区）で頻繁に起きた。中原を押さえた勢力が中国の正当王朝になったからである。西南地域は人々があつとりしている。貧しいが食にはあまり困らなかった地域である。

東京から成都へ、成都から東京へ、行ったり来たりしている。東京は世界経済の中に組み込まれている。上海、北京、広州もそうだ。マーケットのスピードに合わせて、仕事の速さが求められる。上海・北京・広州は中国ではない。ニューヨーク、東京、ロンドン等の世界経済システムに取り込まれている。市場がたち、世界の資金がグローバル化というスピードで流れすぎていく都市になってしまった。

西南地域は違う。もともと中国人は自分の生活リズムを大事にする習慣がある。西南地域はそれに輪をかけたように自分のリズムで動いている。四川料理は辛くてシビレル。とにかく山椒の味が効いている、山椒が無ければ生きていけない。重慶も同じだ。貴州にいくと、辛さ中心、山椒がなくなる。昆明にいくと、東南アジアの辛さに近くなる。というより薄い辛味と酸味の組み合わせになる。昆明の人は米粉で作った麺が大好きである。辛・酸のスープにこの麺をいれて食べる。美味しい。

成都・重慶では街角100メートルおきに道端でマージャン卓を囲んでいる姿を何時もみかける。他の地域ではカードで遊んでいる。4店の軒を並べており、暇な4店舗の店番が店の前の道端で卓を囲みマージャンやカードで暇つぶしをしながら客待ちしている。食事するのも店の前、道端である。道（路）は公共空間、色々な使い方をしている。日本の道（路）は管理されすぎている。歩く人しかいない。

東京から成都へいくとリハビリに数日かかる。生活・仕事・食べ物のリズムが違うのだからしょうがない。逆もしかり。

大学の現役先輩（70歳）が半月日本、半月上海の生活をしている。彼曰く「日本にいとダルクなる」、上海にいと「感性がピリピリしてくる」と言いながら、東京・上海の往復生活をしている。彼は今の若者（幾つだろう？）の感性が理解できない。例えば、テレビを見て、彼と若者は笑う場面が違うのだ。僕にも同じ経験がある。そんな日本に長くいるのが耐えられないのだ。そこで、上海で仕事、刺激を受けて、日本に戻って来る。昔だったら、行きっぱなしになる人種だろう。

国と国との間の移動（ワープ）について書いたが、人それぞれ時間によって違う環境に移動している。航空機の発見により、距離が無視できるような移動ができるようになった。人間の頭の中はそう簡単に移動できないようである。

## 事務局からのお知らせ

### 事務局からのお知らせ

#### 1.事務局より、日本国際情報学会誌『国際情報研究』第六号の論文募集と平成21年度総会及び研究発表大会のご案内を申し上げます。

日本国債情報学会誌『国際情報研究』第六号の論文募集の日程です。

原稿提出締め切り	2009年8月20日
査読終了	2009年9月20日
査読後再提出締め切り	2009年9月30日
発行予定	2009年月10月中旬

を予定しております。

会員の皆様方のご応募お待ちしております。

投稿規定等、詳しくは学会ホームページをご参照ください。

<http://gssc.jp/siss/gosira2009c.htm>

#### 2.平成21年度総会及び研究発表大会のお知らせ

日時:2009年11月28日(土)29日(日)

場所:日大会館7階701号室

上記、日程にて予定しております。

会員の皆様には大会へのご参加やご発表はもとより、大会でのイベント、シンポジウムのご発案等よろしくお願い致します。

#### 3.事務局人事のお知らせ

入退会手続きをはじめとした事務の一層の効率化をはかるため、事務局長補佐として会員の児玉善子さんに事務局の業務をお手伝いいただくこととなりました。何卒、よろしくお願い致します。

#### 4.平成21年度日本国際情報学会会費納入のお願い(未納の方)

平成21年度分、未納の会員の方へ会費のお支払いのお願いいたします。

学会口座の銀行を変更いたしました。銀行入金のさいご注意ください。

振込先 ジャパンネット銀行

支店名 本店営業部  
店番号 001  
預金種目 普通預金  
口座番号 2238472  
口座名義人 日本国際情報学会

近日中に未納の会員にメールで請求の連絡をいたします。なお、平成20年度以前に会費未納の方に つきましたは、未納年の会費を含めてご請求いたします。

#### 【ご注意】

未納の方で退会を希望されます会員は会則規定により、平成21年度会費(未納年度を含む)をご請求いたします。

なお、請求にしたがわない会員は除名処分になる場合がございます。

以上、ご不明な点やご質問がございましたら、事務局、増子宛 にお問い合わせください。よろしくお願い致します。

事務局長 増子 保志 [siss-work@gssc.jp](mailto:siss-work@gssc.jp) @ に変更してください。

事務局長 増子 保志



## 特別報告

### 日本学術会議協力学術研究団体に指定される

日本国際情報学会が日本学術会議の「協力学術研究団体」に指定されました。日本国が学会として公的に指定しているのは、政府の諮問機関である日本学術会議の「協力学術研究団体」です。「協力学術研究団体」の指定されたということは、日本国際情報学会が公式な学会として認められたことを意味しています。

日本学術会議の「協力学術研究団体」指定を受けるため、必要な学会活動実績等を書類にまとめて日本学術会議に申請を行い、約5ヶ月間の審議を経て無事に認可を得た次第です。これも学会設立以来、活動実績を積み重ねた会員皆様の活動努力の賜物です。また、審議中、協議会からの数度の質疑対応にご尽力いただきました村上理事、事務局の皆様大変感謝申し上げます。

今後、公的な学会として、世界に向け情報発信を行い、社会に貢献する学会を目指したいと存じます。これを機会に学会運営の合理化、活動の充実、会員サービスを目指して事務局と連携して学会運営をますます充実させる所存でございますので、会員の皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

IT運営委員 坊農 豊彦

## 編集委員会からのお知らせ

### 学会誌表紙写真の募集

**貴方の写真で学会誌の表紙を飾りませんか!**

前回から、日本国債情報学会誌『国際情報研究』の表紙に写真を使用しました。東京の立川にある昭和記念公園の銀杏並木の風景です。日本国債情報学会誌『国際情報研究』第六号の表紙に是非貴方の写真で飾りませんか？

#### 応募規定

- 1) 未発表の写真
- 2) 個人を特定する人物が入っていない等、十分配慮願います。
- 3) お一人様2、3点の投稿を限度に1メールに1点を添付してください。
- 4) 応募先

編集委員会 村上恒夫 [siss-edcom@gssc.jp](mailto:siss-edcom@gssc.jp) @ に変更してください。

編集委員 村上 恒夫

## 編集後記

+ ... .. +

今号は大阪発表会の特集号です。  
大阪の発表会からニュースレターの発行まで時間が厳しいものでした。  
予定よりも少し遅れましたが、無事発行できました。これも私の非礼な寄稿要請に快く引き受けて下さった、寄稿者の皆様のおかげです。ニュースレターが読み辛いと言うご不満を、読者の方々が感じたらそれは、寄稿者の責任ではございません。稚拙な編集をした、担当者の能力不足に責任があることを申し添えておきます。

もし原稿等、お願いした場合は、是非あきらめてご寄稿くださるようお願い申し上げます。

編集、発行担当 理事 村上 恒夫

